1902　Der Beethovenfries (Zweite Langwand detail). Gustav Klimt

エキゾチック緑青

生活哲学者・消費行動研究家
辰巳　渚

緑青（銅の青錆）は、なぜ日本で猛毒だと捉えられるようになったのか。日本だけの現象と聞くと、たしかに不思議だ。

すでに緑青は無害だと立証されており、いろいろな資料では、有害だと捉えられるようになった理由も推定されている。精製技術が未熟だったころは猛毒の砒素が混入した銅製品が多かったためとも言われているし、銅管を使った瞬間湯沸かし器による「青い水」や、銅製の調理器具の緑青が、ちょうど公害問題の時期と重なって不安を呼んだことも大きいだろう。一九世紀末から戦後までの長期にわたる足尾銅山の「鉱毒」事件が、「銅」と「毒」とを自然に結びつける働きをした面も否めない。亜硫酸ガスで植生を失ったハゲ山、渡良瀬川流域からとれた「カドミウム米」のイメージは、公害の原点としてあまりにも強烈に日本人の脳裏に植えつけられている。

これらの、歴史的なわかりやすい理由はある程度うなずける。けれども、私は色という視点から「緑青はなぜ毒になったのか」を考えてみたい。

緑青色のイメージ

緑青を先入観なしに見てみよう。素直な目でみれば、その色はあまりにも目に鮮やかだ。銅葺の屋根や顔料などで見る、やや青みと白みを帯びわずかにくすんだ、はっとするような色。この色が、私たちの心になにかを喚起するのではないだろうか。

こころみに、緑青の色をイメージしたときに私が思い浮かべるものを列記する。孔雀石、翡翠などの玉（ぎょく）、しっとりと物の表面を覆いつくす青黴、口にしてはいけないと親に諭された青梅、岩や古木に生ずる青苔。

一般的な緑色からイメージする、植物の緑、甲虫類、エメラルドのような宝石、ガラス、南国の海とは、少し違う。

硬質なというよりはやわらかく、陽性というよりは陰性のものに、緑青の色は結びつく。そしてさらに明朗無害というよりは、複雑でほんの少しの「毒」を含んでいる。少なくとも、食べ物とは結びつかない。だが、加工することで人に近くなる。孔雀石はクレオパトラの目元を飾り、翡翠は女性の身を飾り、青黴からはペニシリンが取れ、青梅を食すことができる。

この「毒」とは、「大人びた」などと言い替えてもいいかもしれない。光を乱反射する宝石と違って、光を中に閉じ込めてたゆたうような玉の美しさを愛でるのは大人の感性だ。転がる岩であるよりは苔むす岩をよしとするのは老成だ。

ちなみに、白っぽい青緑色は、死者の色でもあろう。聖書には、ヨハネ黙示録に書かれた「視よ、蒼ざめた（pale）馬あり、これに乗る者の名を死といい、黄泉これにしたがう」という形容がある。

神秘性と畏れの感情、そして日本的であること

緑青が「毒」と結びついたのには、この色が持つ神秘性が関係しているのではないだろうか。

神秘性ということでいえば、日本では伝統的に紫がもっとも尊い色だったが、紫には人間味がある。血の通った色だといえる。毒性を帯びた色ということでいえば、（いまでこそ忘れられているが）赤であった。古来、水銀やカドミウムを含む赤土を「丹」と呼び、古代には水銀などの精錬をする「丹生」という専業の部族がいたという。

それらに比べて緑青は、人に近いようで人を近づ

Water-Lilies. Claude Monet

けない、不思議な色。変質を内包する色。私たちは無意識のうちに、その神秘性に畏れを抱くのだ。毒々しい色ということでいえば、鮮やかな色はすべて毒々しいとも言い換えられる。いかにも毒々しいから猛毒と間違えたのではなく、緑青という色が「敬して遠ざけよ」といったメッセージを発しているのだ。

そう捉えると、現在、皇居の屋根をはじめ寺院や神社の屋根や、立派な建築物の屋根が緑青で覆われているのは、筋が通っているではないか。単に「高価な屋根材だから使える人が限られている」という理由にとどまらない現実だと思う。

最後に付け加えれば、私は緑青という色はとても日本的だ、という印象を持っている。この印象と、前述のやわらかさ、陰性（湿度）、複雑さという印象は、よく重複する。

日本の絵画において好んで使われた色だという事実にとどまらない。たとえば、一九世紀末のジャポニスム（印象派やアール・ルーヴォ）において描かれた絵画を思い起こしてみよう。クリムトやミュシャ、モネやドガ。そこに緑青への偏愛が見られるように思えてならない。緑青に神秘的なエキゾチズムを見たのではと思うのは、考えすぎだろうか。

生活哲学者
消費行動研究家

辰巳　渚

1965年　福井県生まれ
1984年　東京都立 立川高校卒業
1988年　お茶の水女子大学 文教育学部 地理学科卒業
1988年　株式会社パルコにて、マーケティング雑誌『月刊アクロス』記者、編集者
1990年　株式会社筑摩書房にて、書籍編集
1993年　フリーのマーケティングプランナー、ライターとして独立
2000年　著者『「捨てる!」技術』（宝島社新書）が100万部のベストセラーに